

甲斐規雄教授のご勇退によせて

—思い出の記—

森 下 恭 光

この度、甲斐規雄教授が停年までに数年を残しながらご自身の判断でご勇退なさることになったのは、長くご交誼をいただいた私にとって、極めて名残り惜しいことである。

そこで、ここに私は先生にお付き合いいただいた約40年の年月の中から、幾つかの時期を選び、その時点での先生について、記憶をたどりながら記述させていただくことにする。いわば、思い出の記とでもいうべきものである。

甲斐先生に最初にお会いしたのは、1964年（昭和39年）であった。その時、先生も私も早稲田大学大学院文学研究科に籍を置く学生であった。共に教育学を専攻していた。そして、共に、児玉三夫教授（後の明星大学第二代学長）のゼミでデューイの『私の教育信条』の原書をテキストにして学んでいた。デューイのこの著書は、既に児玉先生ご自身によって翻訳され出版もされていたが、原書をテキストにしてわれわれは、一人ひとりが翻訳をする意気込みで取り組んだ。そのテキストづくりを甲斐先生は引き受けられ、タイプし、印刷されたものを毎回用意された。それを見て私は、先生が児玉先生の信頼を深く得られることと、その卓越した語学力に注目した。

次に先生に接したのは、先生が明星大学に勤務されるようになっていた1966年である。その頃先生は、明星大学に通信教育の課程を開設する準備を児玉三夫先生（当時は本学副学長）の指揮の下で、文字通り終日奮闘しておられた。その甲斐先生より、開設のために必要なテキスト作成の手伝いをしてもらえないか、との依頼があり、適格であるか否かも省みず、お引き受けし、その縁で時々先生の仕事を訪ねた。そういう時、先生は多忙でありながらも余裕ある風情でパイプタバコの煙をくゆらせておられた。先生の向いの席には文部省OBの藤井為六氏がおられ、こちらも悠然として執務されていた。先生達の猛烈なご努力の結果、翌年、通信教育課程は設置されることになった。

次に思い出されるのは、私も明星大学に勤務するようになり（この時既に結婚していた）、明星大学の至近距離にある明星大学教職員住宅に住むようになった頃のことである。当時、甲斐先生も同じ住宅の住人で、しかも同階（2階）であったから、先生とも、そのご家族とも日常的に顔を合わせていた。先生は相変わらず多忙で、通信教育を軌道に乗せるため、北海道から沖縄まで、時期を選び、集中的に教育委員会を訪問して、明星の通信教育のPRに奔走しておられた。

この頃のことを思い出す度に、よく健康を害されなかったものだと感嘆の念を禁じ得ない。また、同時に留守を守られ、子育てに献身された奥様のご苦勞も私などの想像を超えるものがあつたであろうことに心を動かされる。

次に思い出されるのは、1990年の頃である。先生も私も50歳になっていた。当時、先生

は学生部長として、私は総務部長として忙しい日々を重ねていた。ただし、甲斐先生は学生部長という職を堅実にこなされていたが、私は、総務部長という職をよく理解せず、右往左往の日々を過ごしていた。程なく、学生がクラブ活動中に重傷を負うという事故があり、学生部も総務部も関係することであったので苦悩する局面もあったが、そういう折も当惑するばかりの私に対して、先生は沈着で、適切な処置を次々となされた。その結果、一応の結着を得ることが出来たのである。そういう時の先生は実に頼もしく見えた。

そして、ここ10年程の先生は、学究としての生活に没頭された。先生は学生時代から幼児教育の祖ともいべきフレーベルに深い関心を寄せられ、ドイツ語で書かれたフレーベルの自著や、フレーベルに関する研究書、さらには、広くドイツを中心とするヨーロッパの教育思想について研究を深められ、学会誌等にその研究成果を発表しつづけられ、現在に至っている。そして、最近では、ペスタロッチ・フレーベル学会の役員をつとめられ、その事務局長として活躍されている。

以上が、先生について思い出すことの中で強く印象されていることであるが、もちろん、先生は私の小さく狭い見識で計れるような方ではない。学究としての卓越した能力に加え、学生時代より楽しんでいる謡曲などの趣味を豊かに持たれる先生のご勇退後の日々はさぞかし実り多いものであらうと想像される。

先生のご多幸とご活躍を祈りつつ拙い文を結ばせていただくことにする。

追記

2006年1月28日（土）に明星大学シェイクスピアホールで先生の最終講義が行われた。当日、シェイクスピアホールを埋めたのは、先生のゼミ生として学部、大学院で指導を受けている学生や卒業生に加えて、活躍場面の多彩であった先生を敬慕する方々、また、本学の同僚教師の面々で、盛大なものになった。その上、特筆されるのは、先生の奥様を始めとして、ご家族の方々も来場されていたことである。家族を大切にされる先生の面目が躍如とする光景に、私は深い感銘を受けた。

最終講義の後、学生、卒業生、お孫さん達から花束が贈呈され、それを手にされる先生の和やかな笑顔は忘れがたい印象を与えるものであった。その際に撮影された写真の数葉を掲載しておいたので、ご覧いただきたい。